

書評 1 *Essential Academic Skills for University Research* へのコメント

塩 谷 昌 史

I. レポートの書き方と報告の準備

著者自身が別の項で、本書¹⁾ 全体の内容を紹介しているので、私は本書を読んだコメントを記してみたい。本書は学部1年生から使えると著者は書いているが、私が学生を教えた経験によれば、1年生にはやや難しい内容となっており、学部生の卒業論文や大学院生の修士論文の参考書として活用するのが相応しい。本書は米国流の教科書編集の慣例を踏襲していると考えられる。私は米国に短期で数回滞在したに過ぎないが、そのわずかな経験でも、標準化して表現する、優れた文化が米国に息づいていることを実感した。標準化して表現する文化とは、想定される事象や作業工程を簡潔に標準化し、誰にでも理解できるように、言葉で表す文化を意味する。日本にも標準化して表現する文化はあるが、欧米と比べると徹底されておらず、言外の意味を自身で推測する必要がある。つまり、日本は全てを言葉で表現するのは避け、「あうん」の呼吸を重視する。しかし多民族国家の場合、曖昧な表現では、異文化や異宗教の人々に伝わりにくい。本書では、レポートや論文の準備過程を標準化した後、簡潔で易しい英語で書かれており、米国の標準化して表す文化を活かす形で編集されている。

私自身はロシア研究を専門とする。1990年代初頭までソ連は米国の敵国だったため、米国はソ連研究を熱心に進めた。そのためロシア以外の外国では、米国がロシア語文献を最も豊富に揃える。1996年に私は大学院生として、米国のイリノイ大学スラブ研究センター²⁾の夏季プログラムに参加した。現地に到着し登録を済ませると、センターから分厚い説明書を渡された。そこには大学の様々な施設の使い方から生活にいたるまで、具体的にわかりやすく説明されていた。私は日本の大学で、その種の説明書を見たことがない。その他にも、米国の大学院のコースリーダー（教科書）は優れている。私は2003年秋に米国のモンテレイ大学³⁾に3週

1) Aukema, Justin (2023a) *Essential Academic Skills for University Research: A Historical Studies Perspective*, 大阪公立大学出版会.

2) <https://reeec.illinois.edu/>

3) https://en.wikipedia.org/wiki/Middlebury_Institute_of_International_Studies_at_Monterey

間滞在し、ロシア研究の実態を学んだ。米国の大学院では通常、各授業にコースリーダーが準備される。授業で学ぶ際に必要な論文が精選され、コースリーダーに収められる。各コースの教科書を読めば、短期間で専門領域の全貌がつかめる構成になっている。私はそこに機能性を追求する米国の文化を見た。米国の標準化して表す文化や、機能性の探求が、本書のテキスト編集に影響を与えている。

本書は英語での論文の書き方を丁寧に教えるが、それ以外にも類書に見られない、著者独自のメッセージがある。それは第8章の「歴史資料：図像分析」⁴⁾である。歴史研究者は通常、歴史資料に基づき研究するが、視覚資料はそれほど重視しない。図像を研究に活用すれば、読者に著者の主張を説得的に伝えられる。近年、図像のデータベースが充実しており、図像は活用し易くなっている。実際に本書で、図像データベースの例がいくつか示されている。「先斗町の景観」の比較は実践例として興味深い。電信柱が先斗町の歴史的景観を損ねるとの声が上がり、電信柱を取り除き地面に埋める動向を新聞が報じている。しかし著者は100年前と現在の先斗町の写真を比べ、先斗町に現れた電信柱が、かつて近代の象徴だったと指摘する。実際の「歴史的景観」を人の記憶に頼って確認するのは不完全である。現在の視点だけで過去の景観を想像するのは難しく、その想像が思い込みに過ぎない場合もある。過去の実際の景観がどうだったかを確認するには、当時撮影された写真を見ると一目瞭然になる。このことは「電信柱」以外の歴史的景観にも当てはまるだろう。

第12章の「プレゼンテーションを作る」⁵⁾も、米国の標準化して表す文化を反映している。この章では、研究報告の準備の仕方だけでなく、発表の方法も丁寧に説明される。例えば「1スライド当たり平均2分費やす」や、パワーポイントの形式は「表題—概要—内容—結論—参考文献」の順にした方が良い、等のアドヴァイスは初学者には有り難い。言葉よりも図像（イメージ）の方が聴衆に分かりやすいので、プレゼンテーションに新聞記事やブックカバーの図像を活用することも勧める。データやグラフで示す方が、口頭の説明よりも効果的との指摘は実践的である。最後に、聴衆からの質問対応にも触れる。全ての質問に回答する必要はなく、可能な範囲で質問に答えればよい、との助言は初学者の緊張を解く。質問は研究を発展させるのに効果的だと、質問の効用も説く。私も聴衆の質問が契機となり、思考を展開したり、研究対象を異なる視点から再検討した経験がある。質問への対応と質問の効用を説く部分は、日本語の類書では見られない。

本書を通して報告書が例として挙げられる際、著者が実際に執筆した文書の一部が示される。それ以外にも、公文書の例としてGHQのデータベース写真が、地方紙の例として『京都日出新聞』の新聞記事が示されるが、これらの資料は本書向けに準備されたのではなく、著者が報告書や論文を執筆する際に収集したものである。中には7章、8章、9章と、章を跨いで取り

4) Chapter Eight: Historical sources: image analysis

5) Chapter Twelve: Making a presentation

上げられる「京都の第十六師団の戦跡」という話題もある。本書の注によれば、この論文は2023年に刊行された英語文献に収められている。

本書の第1部を通して、初学者は論文の手ほどきを学べるが、研究者は、アウケマ氏がどのようなスタイルで研究しているか、つまり、著者の研究の舞台裏を知ることができる。著者の研究手法を理解するために、「京都の第十六師団の戦跡」の研究⁶⁾を次節で紹介してみたい。

II. 陸軍第十六師団の戦跡

私は京都市出身だが、旧陸軍第十六師団については本書で初めて知った。大阪や東京と異なり、第二次大戦中に米国戦闘機の空爆を受けなかったため、京都は先の大戦と関連が薄いと考えるのが、京都市民の一般的感覚である。しかし、アウケマ氏が本書で記しているように、京都の第十六師団は満州、南京、フィリピンの戦線に派遣されており、実際には京都と戦争は緊密な関係にあった。第十六師団の本部は戦前、深草（京都市伏見区）に置かれたが、戦後その跡地が龍谷大学等のキャンパスに替わる。私は1998年に龍谷大学で非常勤講師を務め、深草キャンパスに通っていたため、深草は馴染み深い。しかし当時、深草キャンパスが第十六師団の跡地とは知らなかった。論文に引用された『龍谷大学50年史』の一説によれば、龍谷大学は第十六師団の戦跡を肯定的に語っていない⁷⁾。アウケマ氏の論文は、第十六師団の戦跡をどう捉えればよいかを論じている。

日本は第二次大戦に敗北したので戦勝を祝えない。そのため日本では、先の大戦の記憶をどう伝えるかは複雑な問題になる。日本は敗戦国であり、戦争に参加した兵士を公然とは讃えられない。したがって日本では大戦の被害を記憶に留め、国民の不戦意思を表明することが中心になる。広島原爆ドームはその象徴だが、米国の原爆により広島市民は甚大な被害を受けた。その戦跡を残し、将来に大戦の悲惨さを伝え、二度と戦争を繰り返さないと意思表示するのが日本では慣例である。被害者としての戦争の記憶は、継承し易い一方、外国に被害を与えた加害者としての記録を、直視するのは難しい。戦争加害者としての記録が正面から取り上げられることは少なく、加害の事実から目を背けやすい。著者が焦点を当てる第十六師団は、外国での加害記録と密接に関わるため、京都で公に語られることはなく、兵士の遺族会で第十六師団の栄誉が静かに囁かれるに止まる。

日露戦争中の1905年に、大日本帝国陸軍第十六師団が編成され、満州に派遣される。日露

6) アウケマ・ジャスティン (2023a) 「日本の戦跡と歴史認識—京都の軍事施設を事例に—」『京都女子大学現代社会研究』第23号, pp 5-21; Aukema, Justin (2023b), “At the Border of Memory and History: Kyoto’s Contested War Heritage”, In Edward Boil(ed), *Heritage, Contested Sites, Conflicted Sites and Borders of Memory in the Asia Pacific*, Brill Academic Pub.

7) アウケマ・ジャスティン (2023), p. 14.

戦争後の1907年に、第十六師団司令部が大阪府泉北郡高石村に置かれるが、翌年に第十六師団司令部が京都の深草村に移ると、歩兵や騎兵隊約2万人もそこに配置される⁸⁾。16師団の最寄り駅は京阪沿線「師団前駅」（現在の藤森駅）になる。敵国の攻撃対象になるのを避けるため、1941年に駅名は「藤森駅」に改称され、現在に到る。1919年に第十六師団は満州駐在を命じられるが、1929年と1934年にも満州に駐屯する。1937年に日中戦争が勃発すると、第十六師団は華北戦線に投入され、南京攻略戦に参加する。1944年に第十六師団はフィリピンに送られるが、そこで師団はほぼ壊滅する。このように第十六師団の歴史を紐解くと、第二次大戦と京都が密接に関わっていたことが明らかになる。1945年の敗戦後、第十六師団の施設は大蔵省の管轄に移るが、施設の跡地はその後、聖母女学院、京都教育大学、龍谷大学等のキャンパスに替わる。深草周辺では、第十六師団の記憶は薄れ、今や大学街というイメージが先に来る。

戦後、第十六師団の敷地は大学のキャンパスに替わるため、第十六師団の記憶を留めるものは無くなる。第二次大戦後、元兵士の死が国家と国民から忘れ去られるが、それを防ぐため、1953年に福知山市の遺族会は約20万人の戦没者名簿『平和の礎』を刊行する⁹⁾。1968年の明治百周年事業に合わせ、第十六師団の遺族は記念碑「京都歩兵連隊跡」を藤森神社に建立する。ところが、1980年代に東氏の日記を含む、第十六師団元兵士の記録が一般に公開されると、師団が戦争中に外国で加害を行った事実が明らかになる¹⁰⁾。1937年に東氏は日中戦争に参加し、第十六師団が南京で市民に殺戮を行った事実を日記に記すが、後にそれを刊行した。これを契機に、第十六師団の史跡に焦点を当てる研究が増える。これらは戦争における第十六師団の加害記録であった。1990年代後半以降、右翼や歴史修正主義者が日本軍の残虐行為を否定するため、南京大虐殺を証言する元兵士に、嫌がらせや脅迫が行われる。第十六師団の元兵士を美化するのは構わないが、戦争で元兵士が虐殺を行った事実は無かったことにしたいという、日本人の複雑な心境が表れる。

歴史遺産とは、将来のための資源として過去を遺すものである。元第十六師団の関係者や遺族は、戦跡（師団の施設）を保存するのではなく、記念碑「京都歩兵連隊跡」を建てることを選んだ。元兵士を弔う形で第十六師団を記憶することは推奨されるが、戦時中の日本軍の残虐行為を記憶し、保存するのは良しとされない。戦跡は、アジア・太平洋戦争に関する、日本の歴史認識を測る尺度であり、第十六師団に関わる戦跡を明確に評価できないのは、日本人の戦争記憶の複雑な感情を示す、と著者は結論づける¹¹⁾。

8) 同上論文 p. 9.

9) 同上論文 p. 15.

10) 同上論文 p. 17.

11) 同上論文 p. 6.

Ⅲ. 批判的思考力の養成

第1部は、どのようにレポート・論文を書けばよいか、という実践的内容だったが、第2部は、どのように批判的思考力を養うか、というテーマに変わる。第1部の内容を学んだことを前提に、第2部は「発展編」に入る。第2部では、科学、ニュース、理論の話題が中心になる。批判的思考力を養うための文献は多々あるが、本書のように科学や理論の話題を取り上げるのは珍しい。

科学では問いを尋ね、仮説を実験で検証するのが基本である。科学は通常、中立で正しいとされるが、第13章¹²⁾で著者は科学に偏りがあると指摘する。トーマス・クーンの『科学革命の構造』¹³⁾や、ユヴァル・ハラリの『サピエンス全史』¹⁴⁾のように、これまでも科学は中立でないとする研究は発表されたが、著者はマルクスに依拠して科学の偏りを指摘する。経済的利害は宗教、文化、政治、科学を含む、あらゆる分野に影響を及ぼすという、マルクスの思考に沿って、科学における利害関係に着目する。現在の科学研究には多額の資金が必要であり、科学研究者は、政府や企業等の資金提供者の要請を、ある程度受け入れなければならない。現代の科学者は、自由な発想で研究を進めようとしても、資金提供者の意向に沿って研究を行う必要があり、科学者が経済的利害等に忖度する面があるのは否定できない。一見中立に見える科学にも、偏りがあると指摘し、読者の批判力を高めようとする。

マスコミで報道されるニュースも中立に見えるが、ニュースの歴史を振り返ると、問題が存在することが明らかになる¹⁵⁾。1942年に米軍が日本を空襲した際、日本の新聞は、そのことをニュースとして報じず、日本政府の戦時プロパガンダに徹した。他方、1945年に米国が広島に原爆を投下した際、広島は軍事基地だと米国のニュースは報じたが、広島市民の多くが犠牲になったことは、米国のニュースから削除された。著者は専門性を発揮し実際の新聞記事を例に挙げ、第二次大戦時の日米のニュースの嘘を説明する¹⁶⁾。一般的に、ニュースを報道する企業は営利企業であり、利益を上げる必要があり、ニュース報道は誇張やセンセーショナルリズムを多用し、新聞販売や視聴率獲得を狙う。ところで、米国の代表的新聞『ワシントン・ポスト』の所有者は、アマゾン社長のベゾスである。ニュース・メディアは所有者に好都合の政治的メッセージを報じることが多く、『ワシントン・ポスト』のニュースも、ベゾスの政治的見解から自由にはなれない。全てのニュースには偏りがあり、ニュースの内容を批判的に理解す

12) Chapter Thirteen: Understanding “bias” in science

13) クーン・トーマス (1971) 『科学革命の構造』みすず書房

14) ハラリ・ユヴァル (2016) 『サピエンス全史—文明の構造と人類の幸福—』河出書房新社

15) Chapter Fourteen: Reading the news.

16) Aukema, Justin (2023a), p. 139.

べきと著者は説く。

私はロシア研究の中で、日本とロシアのメディアを追うことがあり、ニュース報道の偏向をしばしば感じる。どの国のニュース報道でも、ニュースの偏りは免れない。私は以前『日本経済新聞』を購読していたが、『日本経済新聞』が経団連と財務省に忖度する報道姿勢が嫌になり2014年に購読をやめ、英国紙『フィナンシャル・タイムズ』¹⁷⁾に切り替えた。『フィナンシャル・タイムズ』は全世界の経済ニュースを対象とし、日本のニュースも扱うが、国内メディアが取り上げない、日本の経済ニュースも多々ある。また、同じニュース対象でも、日英で取り上げ方や評価が異なる。学生が日英の新聞記事を比較すれば思考訓練になると考え、私の演習(ゼミナール)では、ニュース対象が同一の『日本経済新聞』と『フィナンシャル・タイムズ』の記事を比較し、両国で報道の違いがなぜ生じるかを学生に教えている。この比較により、多角的視野が身につくことを期待している。ニュース記事の比較を通じ、著者の指摘するニュースの偏りを、学生は理解しようと努めている。

第15章は、理論の使い方に焦点を当てる¹⁸⁾。日本の歴史家は通常、歴史資料を重視するが、理論を軽視する傾向が強い。しかし歴史家も無意識に何らかの理論の影響を受けることが少なくない。著者は学生に理論の応用を積極的に勧め、ニーチェの思想を応用した自身のレポートを具体例として示す。本章で著者は、理論に通暁するには古典に親しむか、現代の哲学書を読むのが良いと言う。本書で、著者は一貫してマルクスの理論に依拠するが、空間の捉え方もマルクスに倣う¹⁹⁾。統治層は物理的な生産手段を持つだけでなく、文化的な管理手段も持っているため、統治層は空間に影響を及ぼし、空間を社会的に作り出すと著者は説く。これは戦争遺産にも当てはまり、日本の戦争遺産は、社会が生み出した空間の一形態であり、統治層の思想が戦争遺産に影響を及ぼしていると指摘する。

アウケマ氏の研究手法の特徴は、一つの具体的な対象(戦跡)に焦点を当てつつも、広範囲の歴史的背景と結びつけ、全体における対象の位置づけを示すことである。また、その対象の過去と現在を交差させ、読者に臨場感を抱かせる点も優れている。それは「京都の第十六師団」の研究で具体化した。この方法が実際に本書の多くの章に活かされている。この卓越した手法が今後、教科書を超えて別の領域でも展開されるのを読者として期待したい。

参考文献

- Aukema, Justin (2023a) *Essential Academic Skills for University Research: A Historical Studies Perspective*, 大阪公立大学出版会.
Aukema, Justin (2023b), "At the Border of Memory and History: Kyoto's Contested War Heritage", In Edward Boil(ed), *Heritage, Contested Sites, Conflicted Sites and Borders of Memory in the*

17) <https://www.ft.com/>

18) Chapter Fifteen: Using theory.

19) Aukema, Justin (2023a), p. 153.

Asia Pacific, Brill Academic Pub.

アウケマ・ジャスティン (2023) 「日本の戦跡と歴史認識—京都の軍事施設を事例に—」『京都女子大学現代社会研究』第 23 号, pp 5-21.

クーン・トーマス (1971) 『科学革命の構造』みすず書房

ハラリ・ユヴァル (2016) 『サピエンス全史—文明の構造と人類の幸福—』河出書房新社